

「地方からの若者のつぶやき」 選出3本!

「震災復興・まちづくりとヨソ者」

東日本大震災が発生してから、早くも3年10か月が過ぎ、あと少しで4年という月日が経とうとしている。時間の経過というものは非常に残酷なまでに、私たちに現実を突きつける。

私が宮城県気仙沼市の地を最初に訪れたのは、震災から1年3か月が過ぎた、2012年6月のことである。その頃の気仙沼市は、上着が必要なほど肌寒い日が続いていた。震災から1年以上が経過しても、手をつけられていない被災建造物、海から800メートルも離れた陸に打ち上げられた大型漁船、夜になるとあたりは真っ暗になり、一人で出歩くこともままならない。何もかもが自分にとっては非現実的で、何もかもが新鮮で、何もかもが目には焼き付けられた。

私はとあるボランティア団体に所属し、被災地復興の手伝いをした。その仕事は、震災の風化を防ぐための広報活動や、被災地で行われる復興イベントのスタッフ、交通整備、復興商店街の手伝いなど多岐にわたる。

さまざまな役割を担当させてもらうにつれ、少しずつ自分の活動に自信を持つと同時に、ひとつの疑問を持つようになった。それは、私たちのやっている活動が「本当に被災地のため、被災地の人のためになっているのだろうか」という疑問である。もちろん、やっている側からすれば被災地のための活動をしているのである。しかしながら、現地の人々は本当にそれを求めているのだろうか。本当のニーズがそこにあるのだろうか。

これは、震災復興に限定された課題ではない。最近よく耳にするまちづくりやまちおこしでの事例でも言えることである。まちづくりには「ワカ者、バカ者、ヨソ者」この三者が必要であると言われて久しい。被災地復興でもこの三者は現地で非常に貴重な存在である。確かに、長年その地域に住み続けている人のネットワークのみでまちづくりや復興を行おうとすると、それには限界があることは目に見えている。そこに、ヨソ者の第三者的視点を組み入れることで、新たなまちづくり、復興が可能になることは言うまでもない。

しかしながら、この構造は不安定なものではないだろうか。時にヨソ者は、初めは現地の人々のニーズをヒアリングしたり、現地の人と理解を深めながら地域を活性化させていく。初めはどこもそうである。だがしかし、時間が経つにつれてその土地独自の伝統や文化に戸惑いを感じるが多くなる。そうなってくると、彼らは地域の人々を参加させずにぐいぐいと活動を行ってしまう場合がある。私自身、被災地復興を手がける様々な団体の活動を見てきて、まさにこの通りの、ヨソ者がやりたい放題やっている団体を見かけることが何度かあった。そういった団体を見る度に、「本当にこれは“復興支援”と言えるのだろうか」と強い疑問を感じた。

ではどうしたらいいのか。どうしたら、ヨソ者が自分勝手に活動するのではなく、現地の人々と寄り添いながら、地域にニーズを引っ張り出しながら活動できるのか。私は、ヨソ者がもう一步、地域に入り込む必要性を感じる。郷に入れば郷に従え、とまではいれないが、自分が関わるのである。関わらせていただくのである。自分から足を踏み入れるのであれば、ヨソ者はヨソ者らしくするのではなく、ヨソから来た現地人になりきるべきである。ヨソ者が、地域のことを顧みない愚か者になってしまっては元も子もない。

「地方からの若者のつぶやき」 選出3本!

「それでも沖縄はいいところか」

地元を離れたことにより、「〇〇出身です」という機会が増えたのは私だけに限らない。「〇〇出身です」と口にするると「暖かいよね」や「海が綺麗だった」しまいには「いいところだよ」という言葉を返されるが、その度に私は皮肉にも「そんなことはない」と否定する。私にとって「〇〇」は沖縄である。人々が沖縄を語る際、観光地としての沖縄に焦点が当てられるが、沖縄には、基地の島というもう一つの側面が存在する。確かに私自身も沖縄はいいところであると自負している。しかし後者の側面を踏まえ考えると、果たしていいところなのか。

今年で戦後70年を迎える。自民党谷垣幹事長の昨年末の会見では安保政策について述べていた。安保政策は国民が理解しないとうまくいかず、国会での議論は不毛という旨だった。この意思そのままに、普天間基地の辺野古移設を強行する安倍政権にぶつきたい。また「中国・朝鮮からの軍事的脅威に対抗すべく、沖縄の基地を強化しとけば安心だ」という認識が政府のみならずメディアや世論にも根強い。しかし沖縄に過度な基地負担が持続可能な安保政策になりえないことは、昨年の名護市長選から衆院選までの一連の選挙で明示された。いつになったら声は届くのだろうか。

この基地移設問題を「肺にあるがん細胞の固定化を避けるため胃に移す行為」と例える人もいた。皮肉にも医者である政府はこのような行為を続ける。世間や政府は「保険金がおらず生活できないぞ」と声をあげる。保険金つまり基地収入に依存していると思われる沖縄は、本土復帰直後の依存度15%に対し、現在は5%と大幅に低下、また基地が返還され跡地利用による経済発展がなされれば、さらに低下する見込みがある。仮に基地が経済を支えるのであれば、沖縄の平均給与と失業率が全国的に低いのはなぜだろうか。

沖縄県民全員が基地に反対しているわけではない。ある新聞記事に「基地を招致で活性化」というタイトルを目にした。その地域は過疎化が進む国頭村である。衝撃的な記事だ。「基地を受け入れたがる地域の存在」ではない。とりわけ過疎地域にそういった考えを持つ人々もいなくはない。記事の内容には、「国はその地域に関心を示したが、そういった地域は沖縄県外にも存在する」という旨で受け入れを拒否した。どういうことか、沖縄県内外にも基地を受け入れたい地域が存在するのになぜ辺野古なのか、そして基地はその地域の地方財源になりうるのか。そもそも沖縄に基地が存在しなければそういった考えは生まれなかっただろう。感覚が麻痺している。活性化するために自然を破壊し基地のための敷地を確保することは、本当に活性化するのか。むろん住民のなかには反対意見もでる。基地や軍の話は住民を二分化してしまう。それが本当に地区の幸せに繋がるのだろうか。

改めて問いたい。「沖縄はいいところ」なのか。断っておくが沖縄が悪いところと押し付ける気は微塵もない。ただ思うに、騒音で授業が中断することや飛行機が大学敷地内に墜落するような危険と隣り合わせの地域を「いいところ」言っているのだろうか。私から言わせれば、そういった危険とかけ離れた地域の方が「いいところ」に違いない。そもそも「いいところ」とは、非常に曖昧な表現でかつ人によって基準が違うから判断自体も二分化するだろう。だからあえて「いいところ」という表現を選択した。そういった意味を踏まえて人々に地域の「いいところ」を判断してもらいたい。

「地方からの若者のつぶやき」 選出3本!

「所詮東京を目指す地方活性化なんてやめてしまえ」

私が物心ついた時から「地方の人口流出」や「地方の少子高齢化」といった言葉が世間を賑わせていた。そして最近になって頻繁に地方活性化という言葉を目にするようになり、何とかして人を留めよう、呼び込もうとする動きが盛んになっているように思う。地方レベルでは大型ショッピングモールやインフラの整備を通じた活性化が盛んだ。国レベルでは地方創生に関する部署が設けられており、主に金銭的な面での支援や、関係者の繋がりを構築する場などの役割を果たしている。今回私が述べたいのは、地方を無理に活性化させようとするべきではないということだ。むしろ、その地方ならではの不便さを押し出した方が良く思う。

地方出身である私の周りでも、以前は田んぼしかなかった土地に大きなショッピングセンターが営業を始めたり、綺麗なアスファルトの道路がつくられたりしている。もちろん、それはそれでより生活が便利になるし、今以上に快適な生活が待っているのだが、所詮、地方は地方だ。東京をはじめとする都市部にかなうはずがない。人々の快適な暮らしを求めるあまり、都市部のような街づくりを参考にするのは間違いだ。大型ショッピングモールだって初めのうちは人が溢れるように訪れ、そこだけを切り取るとまさに地方が活性化したように映る。しかし、月日と共に混雑する時間帯は限られ、東京のようにライバルとなる店が次々に立ち並ぶわけでもないので、企業同士の競争原理が機能しなくなる。これは経済にとってマイナスな影響であり、活性しているとは言えないだろう。まさに東京の劣化版と言える状態になる。インフラにしてもそうだ。都市部のような街づくりを目指して、地方をどれだけ物理的に発達させても財政圧迫を助長するだけではないのか。そうであるならば、一体地方はいかように発展させていくべきなのか。ヒントは不便さにある。

東京などの都市部で働くことにうんざりした人々、住むことにストレスがたまっている人々に注目しよう。そのような人たちは静かでのんびりした住処を意識的にも無意識的にも探している。そんな時は地方の出番だ。なにも私は地方をバカにしているつもりは毛頭ない。ただ、ある地方が地方活性化などと声高に叫ぶほど、越えられるはずのない東京を意識しているように感じる。若者の多くは引き留めようとしたところで都市に集中するのだから、そうでない地域は違うベクトルを模索すべきである。例えば不便故に財布の紐を緩める場面が少ないため、「日本一生活費が安い地方」や、最低限のインフラしかないド田舎だけれど高速のWi-Fiが張り巡らされている「会社経営に優しい村」など。都市から地方に移住した人として私が知っているのは、例えばブロガーで有名なイケダハヤトが、東京から高地の田舎に引っ越して素朴に暮らしているというのが世間の話題になったことがある。また、予備校の超人気英語講師である西きょうじも、都会の喧騒から逃れるために長野県の軽井沢に移住している。いずれにせよ、都市に住んでいた人が不便であるはずの地方に求めるニーズというのは存在するのである。

最近B・1グランプリやゆるキャラを通して地方活性化が流行っているようだが、どの地域でもなせる“業”ではないし、注目を浴びるのも一部だろう。どのように地方を賑やかにさせるかが焦点のように思われがちだが、そもそも不便で閑静で自然がある時点で、それは有効な資源なのである。故にわざわざ東京を目指す必要はないのだ。